聞見雜奇伏先傳 第四集 五

142
25
15

東京圖書館

和書門	小說類	二六函	二三架	六〇號	二五冊

TOKIO LIBRARY
東京図書館蔵書

開卷驚奇俠客傳第四集卷之五

東都　曲亭主人編次

第二十九回

女俠死猿を購ふ　駿馬骨を擬ふ
心猿發狂して　大奸黨を懲艾す

却説楠姑娘姫は呉服屋の叔父正直が那島山持永と婚姻の義を談ぜられて呆うまでに腹立ち色を

立ぬべしと。既に南北両帝の御合體もしくるふ足利氏の家臣たる悪嫌ふべうもあれど。開も亦人ふるべき
なり。我身ゞ即男體なる吉野の帝の叡慮ふ従ひ又當今ふ仕へまつるべき足利氏と肩を比べて俱ふ忠義を
盡さんと欲するとも侍るべし。昔も侍る例あり。頼朝卿ふ仕へ奉る和田と秩父と即是ふ那和田三浦は當世ふ春興な
親と忘れて讎と肩を比べと識者ふ許さぬ議りなり。奴家ふ仕る君も亦ふ何を所因ふ怨と忘れて讎と縁
を結んやいでも考へるとなるべし。這河内ふ親代々楠氏の封内でありしと足利氏の寄子の大将畠山義深基
國父子の為ふ年許り攻悩されしが。竟ふ弓折り勢竭て千剣破の城と成るふ由なく。嗚呼哀れなる伯
父君と仰ふ迹と首陽の山ふ脱れて生死存亡安定なるぞ家尊の大人京師ふ當時戦死の必えあり
ぬと鴉の鳴皆ふありとも亦なく間ふ合ぬものと然る嫌談ふ許由が曝布ふ耳を洗ひて去るく欲ふ譚言ふ似
たり。我約人の子たるものその父母ふ告ずして婚縁を厮結ぶと非礼ふ似れ。野合と奴家ふ幸なく。襁褓中より
二親と喪ひて今ぞ告るふ由なけれども墓ふ祈り木主ふ訴て支倍々と告禀し奉る。親の神霊ふ欺ぐ。
許さぬふとなるべしやみづから思ひ知るべし。と宛身の内ふ親を後ふ小父を親と姪ふ猶子のごとく礼
記ふ本文あるべし。親なくなりて今ふて父の處分ふ縁るべしと宜ふ我知るべしと最も惶ると。
身ふ素より我先考の義絶の果ぬ。ぬ礼記の文ふも憑りなり。然ばとも亮だるも侮りまるとて推辞まつる
ぞ忠孝節義の與ふれば。あり怒りもえなるべしなるとなるべし。然るに論えも駕を枉げ言を費やすべし眼
前ふ頭髪を前ふて身を墨染の衣ふ更へ豫覚期の日ふ必ず恨みなんと涙吐む烈女の憤激非義を空ふ
道理と陳べる氣色凄ゞかりければ正直ふ怒ふ困ゞ果て沈吟ゞ亦ゞ考へるべしと思ふ。
合抗やよ嘯姑摩姫腹を立て和女の心烈然ふあるべしと我も亦豫ふ思ひ侍れども。權家の豪囑推
辞ふ由なく枉て那意と侍へるとなるべし。這我ふ及ばずあるべしとも世ふ立
つるの人の與ふ撩役せられて已と枉るとなり。和女郎官途の苦界と知られ志と氣と立るとなる潔しと思ふべし。
ど。不争の徳を自家安全柳の枝ふ雪折り和女もの義と合らぬ我怕らく禍鬼ふ身を置く処なる至べ
その折ふ正直ゞ恁ふと思ふ後悔とも遅るぞ。亦ふ盃の老婆親切ふ似ふ優ふ世ふ
もと無身氣ふ刀と合て身を起すべ次の間ふ侍る垣衣ゞ聲立て河備様のあり立ざと報るとゆて安波

遽く出で来つ正直とを揖して先ず立ち丞関の式臺まで送りける。侍りしかども姑摩姫に敢物とも思ひ
垣衣の件の一議とは知らるとなかりしかば垣衣に次の間に待つて洩れ聞けれ胸安からぬ思ひ難て無次の
低々と那崖略と其き告て姫上の御心強く気色の烈しかりしを叔父君の箇様々々と咲くに詞の末忠
かて侍るべしとせまーとうち譚ふと宥めつ眉を顰めそ去りとも姫上の何とも宜しとあれば諫禀さん便りに
あらーと聰明睿智ふは生女が怒ふ無しと語と過ぎ匹夫と同かるべくもあらぬ然れば諫禀さぞとのみ
ぐ御深慮あらん言ふ出ーと秘めのみねと諭せば垣衣黙頭で誠ふ然と応てあれ安らぬ反胸よりと措
そ煩ふ主思ふ情々地ふ禱る神の加護佛の利益豆暮ふ白日とかるりけり。室下某生再説楠式部少輔
正直八九の荘院と退り折柄宿所へ立もかへらで躯て下赤阪多陣館へ赴かれば持永紋代出迎へて閑室ふ
請ぜる晉待日屬ふ弥増せと正直辞そ席ふ着るを持永ふらち對して在下方発途中より持病の疝
積猛ふ発りて堪くこれいと禀ぜ居りあるとも勉て推参仕り反願ふ左右を遠さけるとのみ持永ふらち
竺てそれ安らぬ反ふ上ふ茶ふ茶ふ茶ふ茶ふ心地いふとなるそと同へ正直頭を掉て否然しるるふ

ぞ。持病ふれば程もなく癒るべうに出へとも久く席ふ堪くふりとのみて四下とススふ其頭ふ人のるくーと忽
地ふ聲と悄めそ豫ふ憑の一義ふよりけふ八九の荘院へ赴るかへさとのふ持永遽く膝を找る満面春色
憶ぞも額と合くそを厳寒の折くふさぞ御労煩けんかー那異ふ首尾甚麼ぞと問へ正直嗟嘆と
在下短才訥辯ふれども和君の與ふ言と惜ぞ姪女ふ説くふ利害とのそーくきく婚姻と薦めーかども姑摩
姫敢従ぞ仰ぜ時伯母智正尼の徒弟ふるべ身ふりと猶佛縁の熟せぬりけんいまぞ形く改ぬ年中勇
猛精進と心い出家ふ異ふ成るでふ男子ふ見ぬべそと云云と薦めーぞ今面前ふ頭髪を剃て人の望を
塞んぞとのみ面色の凄くて當るべうもいらぞ低れば裏番甚麼とも在下るとぞ術ふ無るべ女子るふ
何い女敷ぞ勢ひと既ふ相定めいーぞ腹立くふ罵りと那里を退りぬとのふと持永ふ眼中忽地火を
生と正直と佐と疾視てのんとうて左右るくふぞ安らぬ面を和げるも頷ぞ原来姪女世と果敢
るて出家の情願ひ欲ちの実ふんふ這嫌談と云云と兼ーるるけり叔父公の妻老の妙でまう
敷ぞ婚姻ふ餘人を憑むべくもあらぞ先其気を脱ぞ便宜もあらば商議敵ふ憑るるもあるべ縦

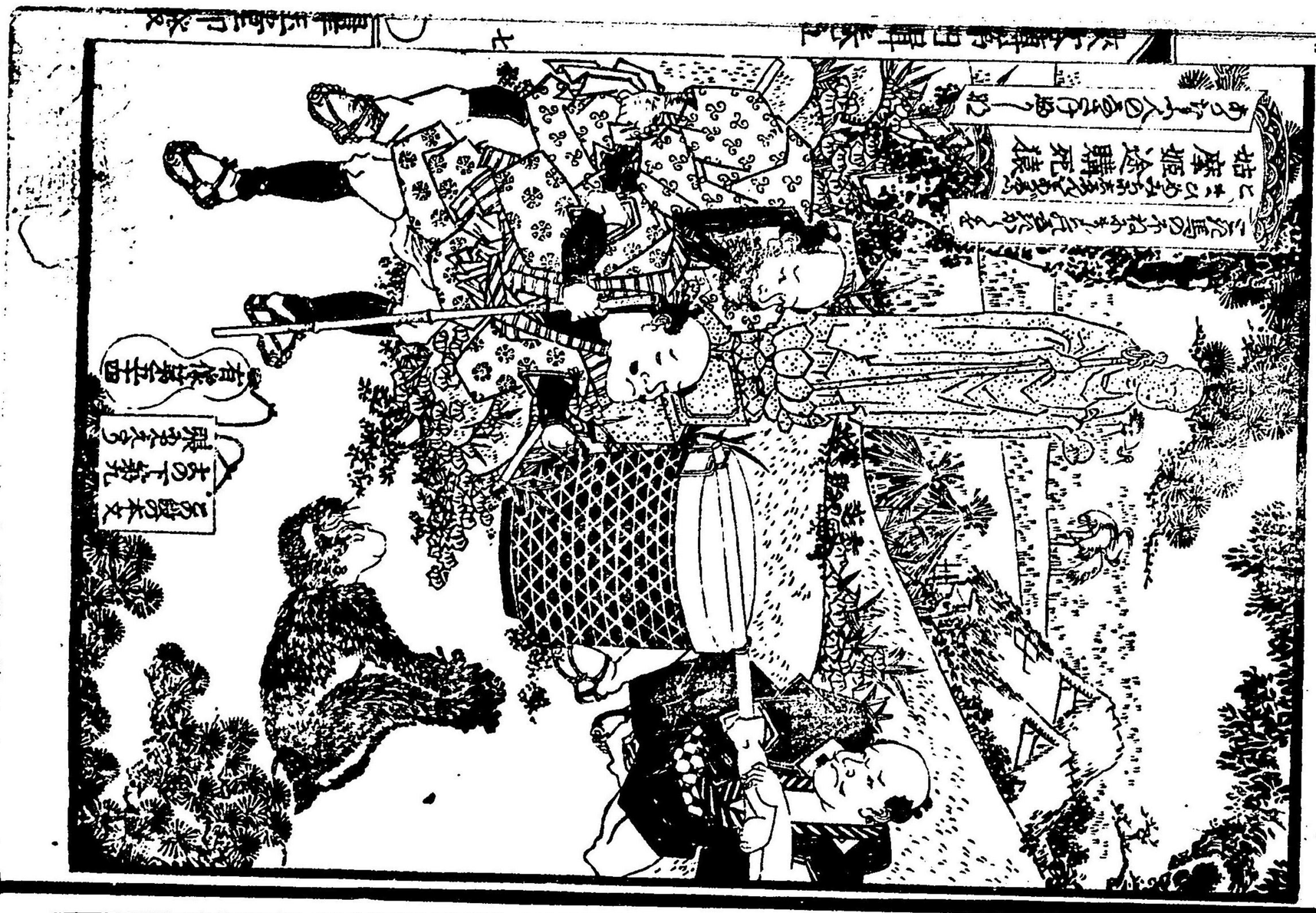
風望成就せざるも今番老人の御親切に感じて最辱くも即の厚き美情に正直初て心
なちおて感ずること大なるに稍々果る頭を抬げて通愛に寛仁大度一朝の怒を人を傷らに一婦人輿に
敢惑ひ世に大丈夫さうなのに誰も恁てあるまじき事整を拙しとそ恨をあん欲と思ひ難く来り
折まで安心のるるーに御一言を胸膈開けて持病も過半癒り可の後推参して復た粋調仕
教じと舒告別て河備の宿所へ還りけり程に持永正直を目送り果て猛可に泰勝媒鳥介を奥へ
な便室に召よせて那姑麻姫と嫻談の支成ざりし趣を箇様々々と解示して那正直奴に無神経なるに足
らぬとるるー姑麻姫に才圓て推辞に出家の情願ありとのりに憎に脱路をるの附に注連を引る用心
こそと這ばれ我もの機を猜せるに故意怒を見いさぞ箇様々々に正直なるに八九へ嗚を後に謀に與に
却いふーとるーんや汝達各智慮を揮ふて十分に隙る闘買をとーとをせよかとられて速に答難く沈
吟じるそ中に泰勝莞尓とうち笑て仰寔に理なるを愚案に愚に愚に決人をそ術に誘へ
かば還て支の障り出来て首尾好らぬ差跨ぞ物のりに故ふてに然に詩も語も要に那美人に外に

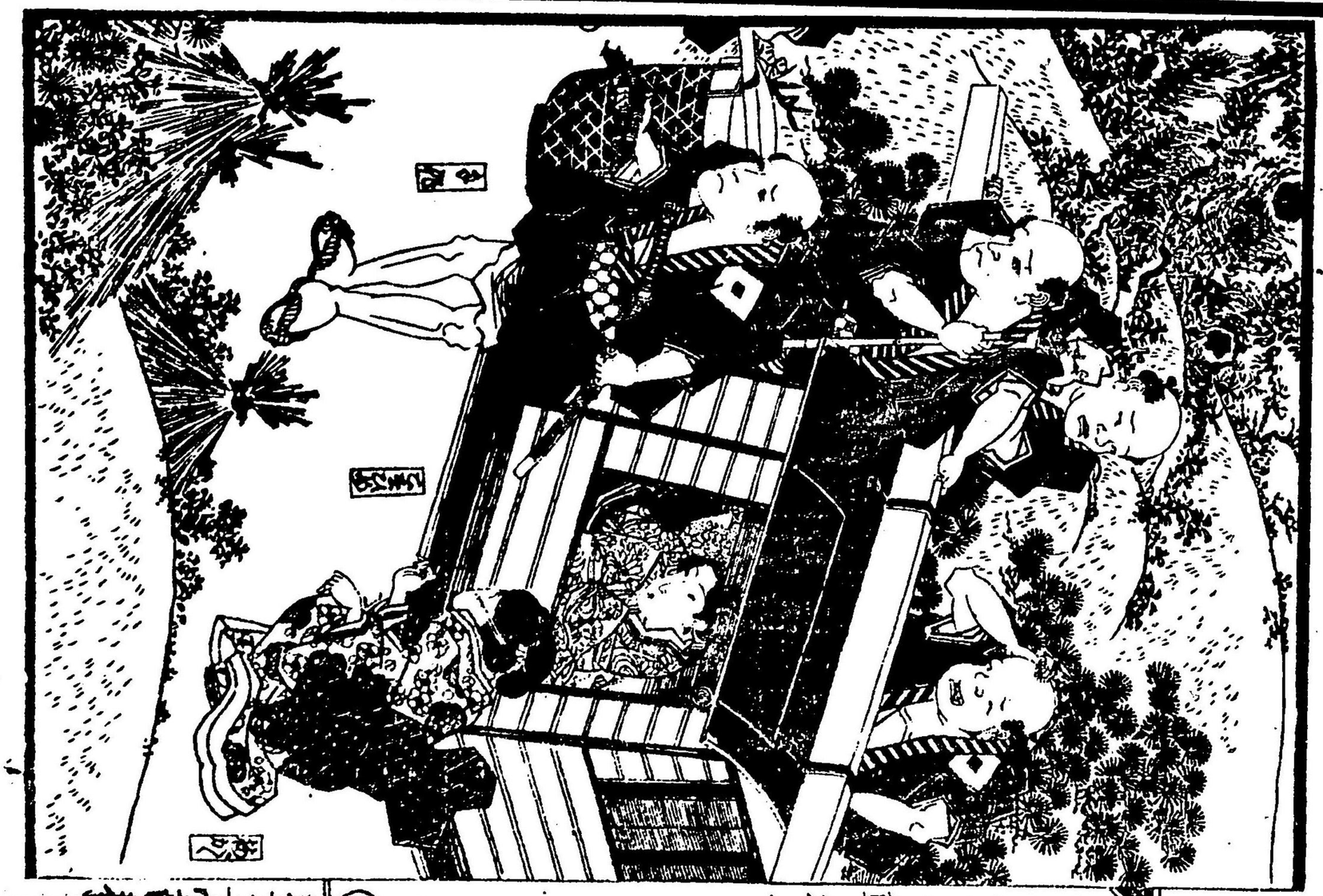
ぶ折を覗ひ見勢をうて捕稠て擽攫に輒く既に及びて他死を極を従ぞとも戮
浮る酒をのとーに或に慰る艶語をうて徐に蕩ーに女子に原是水性に漸々に心動て佳境に入
でに在下舊里に在ー時稲城が女児信夫なる像の如く奈然に従を術を盡せに那小
六奴に妨せられて本意を遂ず支敗れて這身を追放せられを初より老謀計の拙に所以に信夫
幇助を為れ為に媒鳥に推禁めを為るるー凡庸の女子なりせば捕稠て奈集合りもせ
那姑麻姫に跳に武藝剽姚兩繪半額に優を勇婦文れを加る幻術あり上を非除る勢を向るに
を入る飛方を言く數ーに毛を吹て疵を求るに知を陷に泰勝に冷笑て鈍に詞の腰を
折て其頭を簡をてに齊天行者豪表老師に神に使に鬼を斬る法術不可思議今古獨歩の活佛と
世評に憑るに那姑麻姫に幻術を厭勝の秘符なるを然に老師の正法を幻術破れを甲斐なく武藝
剽姚に怕るに足ぞ行者を徴迎て御商量あれかとに持永點頭て謀計極を佳京師に人を遣し
に行者を召迎に先の准備を為よかとに詞を訖に提接の若黨に咬に次の間を来て重紙門の

那方より稟上仕り、齊天行者の詣来ゆえ何処へ請じまゐらせ、
案内せよとのふ若黨ども承て走り、面亭へ退くる程もなく、豪袁、提接の若黨ども、
来りければ、持永并ふ泰勝媒鳥、主僕齊一立迎へ上座ふ請じ茶を薦めて寒暄の口誼訖り、折持
永憶ど膝を找め、老師はの光臨い料らずもけ幸ひ。晩生秘密の一義あり、老師の指教を請まく欲しふ京
師へ脚力を走らせんと思ひ、折でいたるの所以い箇様々々と、那姑麿姫を娶んと欲まる吉の顛末を解示さんとまく
はる。豪袁急ふ推禁めたる笑い拙僧豫より法術を具ふ知れり。因て件の密策を資けまゐらせんと思ふ故ふ
大殿（満家）の然氣ふ量裏ふ稈徙の秘訣を稟ふ與とのこと冷えあれど昨夕這地ふ来着ちれど大殿の憑せぬ。
遊徒（稈徙）ら以ての外ふ止宿と目今出て来ゆる乱身の這地（稈徙）へ那姑麿姫を娶ん與ふ楠美媒
妁ふ来ぬ。ものいはず可ゆ已上ゆるぞ勢ゆ奪合んと欲ふ我法術を借らずい他ふ武藝門術ふ敵
対ふ及ばいたやと、その肺肝を覗るど、機密を知られて主従へ面を照し且驚き且感歎せ。中ふ持永へ憶ぞ
も百會を拊ちて合笑。老師の法勘神出鬼没ふ（の指の神子道麿法師）及んや既ふ亮査せ。如老

師の幇助ふ（の）ぬ素懐を遂ゆ。如什麼と好ん為ふ問へ豪袁、解ふ然ん姑麿姫ふ紙術へ
裏ふ拙僧看破り、那分際ふ知り我厭勝の秘符を貼り、厭ふ忽地醉ふ如く、紙術武藝を自業
ら。這陣館ふて来られ、徒れ先那女ふ外ふ出ふ折を張て、玉簾秘符をもち被て、却伴黨を趕走らしく。姑
麿姫へ来ぬ折一種の名香を焼薫ら、れ猛ふ情慾起り、仇ふ不ふ撑むを、男子と俱ふ臥まく
欲せ。その折臥房へ抱ち去て、小後へ隨意ふ。何の詰むとあらんやと傍若無人ふ説話れ、持永耳傾け
我と為る大勝の秘訣ふ喘ぐ如く息を吻き、現憑ふ妙術奇法就中その名香へ後々まで欲しふ物ふ效
驗ふ（の）ぬ秘抑ふ表ふ甚麼ぞと問へ豪袁然ん、拙僧所持の名香へ唐客亦高価ふ煉用
る紫稍花蛤蚧亭貝の類ふ（の）ぬ那紫稍花と物へ原是龍の精液と龍の海上ふ交るとき精凝て天
洋ふ浮り、形連る珠ふ似ん。これを多ぐ紫稍花と化し其を獲ぐ物へ是と採る者魚卵と為く。偽作
利を貪り人を惑ふ者ふ（の）ぬ故ふ（の）ぬ故ふ（の）ぬ。又拙僧が所持做長上古素女ふ黄帝ふ授ける
ら奇方を法門秘傳の神香へ弓削道鏡これを以て至る所の龍と為ら、頭喜破良香即是。

今の星移り物換りて世を知る者少し。價千金なりとへども身の與に此たび携へ来り。期に臨みて用ゐるも一度用ゐてその神效の違ざるを知られのみとなる。持永雀躍して老師の慈愛萬謝も足らず。非除價貴くともその效あらば數ならず。間諜者を快遣して那八九の荘院の動靜を日毎に覘く。姑麿姫の外出を知るを緊要なり。媒鳥が暇兵を支熟する者あらば教へよと問ふに豪衰推禁めて。その手を煩はすに及ばず。拙僧既に那里の動靜を前より知らんとなす。明日姑麿姫午牌時候に轎子から来る。如意宝珠院へ参詣の年の尾に亡三親の墓を拜んとて。究竟の折なれども。那里の若黨偶屋安次。投石技精妙なり。昨夜遊佐殿に密談して那安次を伴ひ立せ。謀計を定めよ。その計較は箇様々々と詞煩く其所示せば。大家はとく感佩して老師の軍配神機妙算。一言主の神と結托して。役行者とまでも。これ加るものあらんへ。明日何の地方に埋伏して。その爰に誨めこれと左右に請問ふ。豪衰徐かに答へて尽くべきを。語の次に云へ。那宝珠院より七八町遠方に當りて松原あり。其頭の樹蔭に伏隠れ。姑麿姫の女轎を待ち。他の午牌より宿所を出て墓詣に赴る時。必ず前路の折より看定て。他が女轎を下れば分論夏執るなり。先一名前面より立出て行違に折我秘符を。轎子へ投擲れば。囊裡の東西を合るより易し。登時大家走り出て刀を揮ふ。提走らば。姑麿姫の伴當們驚怕れ轎子を棄て皆逃走べし。逃げ脱れて殺されば要なし。却轎子に我加持を。麻索を。牛料を。十文字に勝禁めて。轎子の左右引ん。秘符を夏を拾起して墓地に早く来れば。則満願成就。術の暇を用ゐるのみ。大家連り賞讃して奇妙なりと稱ける。姑且て持永。媒鳥泰勝們ようち對して。老師の隊配を聽聞あるべし。明日姑麿姫を捕る頭人は。俠連二名。まづ京師より隷られる十個の力士を俱して。宜く功を奏すべし。勿論各皇面して那伴當に認られまじと。悄に吩咐して。豪衰もうち聞て。現這両個の頭人は力士十名を隷ねる人數に不足なけれども。初に秘符と轎子へ投擲る折夏熟して通魔を。とくにるるまでぐれども。その機を姑麿姫に暁





得られて計較画餅ふるべし。拙僧既ふ昨夕ありあの美女も然べ。就盛主と商量せ一ふ那木綿張荷二郎い隆光と密訴をくる。右の切るたふあぐれが辛く死刑を宥められて額ふ二の字の金印をめしと放免ふせられとぞ這荷二郎い騙局の猾張杖瘡ふ稍愈れい明日他をまゐ〜ちべ。公子持永とくふうと言ふと用ふるぐ功あんとられふけれが那意ふ儘〜ふ約束をくるべ住れば秘符の一役い那荷二郎と用ふ更明日見参ふ入るべれと告るふ持永いくまもく感悦限りなりけりあふ羊ふ豪奪の密談ふ多く果一於。持永猛ふ心屬て噫云礼ふ支ふ紛れて老師ふ官待疎畧ふるる奴快盃とりて来ぎぬと初て聲を揚り立て連ふ催促ふるるふ不程ふ庵溜の かるあい長總が打揮ふる。即の調理も富む家い魚蔬も人ふも餘りあれば時と移さぬ盃銚子酒菜も種々安排べて。却長總が酌と執りて。軈て賓主ふ薦るふ。持永い明日の支ふるふ入るる心地〜樂さらべるあ〜ば是が我も喫こと客ふも浮て表勝ふも媒鳥ふも盃と取せる。迭の口誼喋〜く猜拳吹擂與ふ無〜と俱ふ笑局ふ入りける。そ中ふ豪表い鄙語ふ云和尚い是色中の餓鬼ふれが目取る大ふ老僧の羊ふる又法衣ふ聴ぐる如く長總と屡相る目ふやらるく酷く醉る癖ふれば序次ふるふ物ふ撫ると長總ふ赤然るふれい亮る

怯む応酬て豪表が授盃と左右るく受ふ推戻と最憚りぐられども奴家法問ふ伺ん。そを立地ふ答ふぐ。ん不盃と賜ふ〜い然ぎい果ふ〜ふとられて豪表含笑て面目甲まれ答ぐ〜ん問ふとべ長總もちち笑て出家ふ五戒とふとあり。その五ふい何々と問ふと豪表吻ふと又ち笑て然べ聖人破戒の罪ふ。そ女子を敵ふ三戒の童子も知ふる。島許るるとと遣返せば長總吻ふと又ち笑て然べ聖人破戒の罪ふ。そ女子を敵ふ老竹葉ふ喫せゆふと。と詰れと豪表羞ふる色ふく。和女郎知ぐる所ふ佛の五戒を立ふ。是凡僧の與ふと。悟道の上の戒ふ心成佛をくるふ。眼ふ艶ふる色ふ。口ふ般若湯と喫ふれども心ふ艶ふる色と。水と淡ふ。とのと悟道正覚の大法師ふ三宝ふ。五戒ふ心ふ水上の月ふ似ふ。それを虚霊不昧と言ふ浮雲明月を掩ふる。月ふ手て損ふ所ふ一色と酒と我を花せども我ふ手と迷ふ所ふ一和女ふ〜ふ知ふ。ふ老師ふ装束ふ受ゆと。又盃と授ふけれが大家ひとく節と拍と老師ふ法談不可思議と咱ふ凡夫ふ。ふれ飲ひべと。盃ふ。ひとく與ふ入ふけ。話分両頭杖前件ふ次ふ日ふ八九ふ荘院ふ姑麻姫主僕い持永が懲ぎまふ執念ふけふ計較ふ佞ふべと言ふ。ふけば手莫ふ上墳と手毎ふけと定めれば垣衣い留守ふ。復一郎い親ふ墓ふ

伴と志べーとそ。今朝より准備せうる程ホにとりけるに遊佐就盛の下知状到来あり尋問ふべきこれあり。家隷一名出さるべ。只今とおりけれ。安次ハ訝りうべ。その状を姑麻姫の身損遂ハ躯て。出て。怪るタ。ホ可い那城内へ今ようと赴ハん。爭何せん御上墳の。伴ハ立ち。加以天さ曇り雪催ふ。ぐるぐるぐん願ハけの御寺詣ハ。且ハ住りの。明日後日の比まりほべーとホと姑麻姫うち伏て。否と。猛ホ障らで。来て。你ハ伴ハ。ハ毎ホけホと定める上墳と延さんや。天ハ晴とも。結陰るとも。身ハ輪子ホうち乗て。両衣ハ龍とうとべれ。其頭のタホ。揖会を。を守護の招ハ公事人。困ハ。ハ快々。安次諫難て。ハ。御意ホ従ハ。ハ。那里の所要を。果ハ。迹より追着ハ。徐ホ出さ。と言義。退て。躯て。他を。ハ。ハ。悄ホ示ホ。我ハ徒らのタホ。けホん伴ホ立ち。日者ハ何と。世間と。を。胸安ハ。ハ。通路の首尾。心のとホ。和郎ハ。ハ。ハ。

賣んと呼ぶ御所望なら買はせう。永樂五百賜りそんとの事。他人の物を盗み出し、親を離れて迷ひ拍子木を打ち、両個の荘客が共侶の頭と掉て、我々は女童子。射て捕る猿猴を殺せ。且寒中の大皮剥ぎ、縁を結ぶ他人推参。直ぐに帰れども、ちと棒と殺せ。性質悪く、遂に路の傍に卸さをする轎夫の頭に、箇様々々と報るぞ。姑摩姫是を聞き果て、菩提の與に貫ふ物の價を論ずるある快々せ。とんでもない他人屋敷。腰に帯る袱包を解開き、銭五百文を出す。客人は、彼の遊女一人が受取て、卒と猿猴を伴ふ送と俱に別れぬ。田夫野人の訪る銭の多少も、賣買日も言ひ見る。聞猿の骸に撫る藤の端を、獨る他が引揚げ、轎夫の頭に来ければ、近まれば、妻と梅香、時嗟と叫ぶ。人の背に駆る大家嘻々と笑ひけり。登時姑摩姫に、亦復た他を嘗て、死る猿猴と、這侯に御寺に招て、遣かる雨衣籠に両撫れば、東西の方、其骸を敛め、迭代に持れと、ある他に、ある果て、却某に、侍ふ。ある示しつる侍ふ、龍牝猴を敛めけり。程なく轎夫に、拾起て、連る路次を、折る夫の晴れ耳に日影煖かなれば、是も亦姫上の、悲深き功德、狂と情語ずる他に、後れんとす梅香と扶けて、倶に走

姑摩姫は、既に、姑摩姫は宝珠院に来ければ、轎子を、水と波と沃る、茅草と梅の花を、梅香の樂、さて、仮墓所に赴く他に、某人に、塵埃を拂ひ、石塔を洗て、先考先妣、維盈夫婦、智正禪尼の墳墓に、水を易花を、向て、廻向の時、程なく、十月の下流れ、疎林風寒く、落葉過半朽ち、月青く、墓標の松、自然則、新非の石卵塔、黒く、塔婆の文字、霜に黄土に解て、粘泥に壊れ、神に紅涙に濡れて、頽れ、乾く眼に見る五色、是色是空、竟に帰る四大、即心即佛、現れ、夢の世と、ふるまひ、這身の美、覚めず、夢の迹訪ぬ、弥陀唱名の功德に、憑られ、彼岸に、道すがら、繰返す、珠数の音、心、稱澄、すぐに、孤回、祝念、果て、姑摩姫、梅香、香に、従て、却本堂に、登る、地蔵に、焼香、登時知客の、僧出迎て、客殿に、請ず、茶を、薦め、最大、鬼火盤に、炭火の、管待、寒に、折る、奇特に、御参詣、祝る、語、寒に、折る、奇特に、御参詣、祝る、語、佛名に、招れて、徒弟の、女僧、三四名、倶に、剛才、姑摩姫、姫、姫、

老僧は丁寧に辞儀を交わし、納所へ退いて、姑摩姫とその間に交渉を仕掛ける。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
足元を見て聊か地理に異の計を立て、箇様なる仕業をかせよかと支詳を試みる。
計策を伺ひ、[illegible]雨衣龍を引き開き、猿猴を合図に、[illegible]輪
子の穏やかなる間に姑摩姫は梅香に吩咐して、茶碗に汲み、茶碗に汲み、然而懐より一丸を推
捧げ、徐に轎子の頭に立寄り、件の猿猴を呼び、現に這言生死を[illegible]
「[illegible]の甦生を遂げ、遊戯命数を[illegible]初[illegible]
及び、倚伏糾纏の仏[illegible]の[illegible]
活人草を一撮みに、日の中へ推容れて、残る[illegible]
と引閉て皆共侶に先んじて、梅香も走って轎子に附添って、姑摩姫
逃げ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

糊糊と塗られれば那も這へも押出隨の一節もなれ落ぎりけり。既りて癖者共は九の伊賞と趕捻走遠の麻索に長
紙三筋を繰出し姑麿姫の轎子を八重十文字に縛けるを中に三四名諸肩入れ抬起すべ成後に跟左右の立て造化
精妙。と悄然たり。雀躍する勇者赤坂の五郎の亜松原の次の来て獨四下に見かるく傍に立て
なる雨衣籠に引起し肩に載せ宝珠院に投て走ること約五町許る。小出男稲塚荻陰梅香の他轎夫共は既に聚合て
待て居る其人の稍かの来るを待て齊一立迎へて後に先に立て悄々地に宝珠院に赴く。
中に梅香渝足走て玄関より客殿に赴て却姑麿姫を並松原に下す。次の趣を固様々と長に報れば姑麿姫も
頷くのみ笑みを神に掩ひ隠り。程に知客の女僧共は稍蕎麥切を調じ果て先姑麿姫を薦め次に梅香に餐
伴當にも送る。庖門より吸入れて蕎麥を喫べ皆物欲しく折れば強るを強ひて碗を置き飽きぬ。
時昼傾て下晡に。姑麿姫は知客の女僧共に歓び演告別て尼公の還るを待て宵に憑を伺か夜に春愛さ
く参詣して法顔を拝せ。めとの果て身を起せば梅香先に走て呼び。當下僧共は僧侍に疎略
なりしを陪話て玄関まで送り出る。姑麿姫は轎子に入れば向之姑麿姫に

て不御聊酔に。日の在る程に豫吩咐なりければ轎子に出の外直ぐ出せ。
従て徐に退る。前に頭巾眉深に草履を踏て暮果る時候に九の荘院に還り。楽下某生再説に
陣館に今朝より姑麿姫を略奪る花喜に准備に倣る程に木綿張の荷二郎は遊佐城に
荷二郎は先行水に浴させ遠侍に召登。豪表と共に出て荷二郎に對面し今番の計較那里の隊配を
く長示せば豪表に示姑麿姫の轎子に向て折の兜文を論え秘符を遮与て准備悉整ひ。
持媒鳥に那轎子に拭禁る加持の麻索二條と豪表に受食を各潜殺束に西刀を腰に跨荷二郎と那力士十名従
へて豪表に指示す。宝珠院の這方に松原に投ぜば後に豪表に一包の名香を持永に授ぜ
男子に教る。女子に老少醜美に寄て一人宜這香を鼻に。貞烈堅固の勇婦に。忽地男子を欲ば磁石の鐵を
吸ふ似て禁んとに制めて隨喜破自香を嗅ば。乾坤無比の室に那人今姑麿姫と轎子と共に奪合
立かの来る折先這香を焚て烟に轎子の内へ吹入れ他の心を蕩て後に轎子より扶出て男子に恭け
て這一役に長總の課に待女郎に倣て姑麿姫の懐に今の餘の修法に倣て詳に其示に持永に姑麿姫の懐に今

酒のまれ妹あるまいぞ顔のいろわ
代女侠老猴闘赤阪別荘
恋をさえけり猿かかも妙く

地と泰敦樂喜ぶ快樂なべうもあれども。実成るまじと慎む。一滴も酒を飲まず。先長總と吾近づけ。計數の趣を。箇様々々と解示し。姑麻姫と轎子より扶出し進退を寡表と共侶叮嚀に教げ。是まで外に他と待ち準備を走るものみければ。持永けはなる冬の日なれば長く覚て立て居て見まを左右と今と立ちまけ。却説あり日黄昏時候。泰勝媒鳥。姑麻姫。男の隨に暑奔する。その轎子と力士に迭代に早く荷一郎も従へ飛ぶ似くかの者。徒と注進しけれ。持永教ぐ走り出て轎子と共に隨に繰と奥へ申入れと程なく卸居き。準備の香爐に焼熏らる破良香と轎子の頭近く坐措げ。長總ぎ扇と扇ぎ煽ぎ轎子の遣筆と平晌計既にて日の暮れれば。持永下知し燭臺に大蝋燭を點ぜ。坐席の四隅に槽甘ぶ白晝のごとく明るけ。登時東表を出て来る香の煙の立つとを時分今を轎子に機る索と解き。とのふ媒鳥と泰勝と力士に伝へ。那と解き又這戻七八重索を稍解棄れば長總ぎ立つと。姑麻姫と扶出し。颯と戸を開く轎子の内より猿猴の活人草の神效に憑り甦生と氣力に本に復せし連に艶香を烟に熏れも。類まれも。牝るに故に情慾發狂まるけ。衝と出て折長總の頭を。酷く撥ぎ人を撫を抱着く。勢に意外の光景に驚れ大家吐嗟と騒聞ぜるに暫時を躊躇を知るに絶てなりけり。

孫恪の妻袁氏ハ夕ハ續世說ニ引テ事文類聚ニ載タル桜ヲ猿ニ猿ハ當時好事ノ富言ナリ

第四十回

隱形の術豪袁長總を救ふ
如醴の交泰勝荷二郎を結ぶ

美人化して湖猿と做る。これを外朝に考れば昔も恁る奇談あり。唐の孫恪が妻袁氏昌延。袁氏に良人恪と俱に峡山寺に詣で折衆猿の林間に拮抗せしを逆に見て。詩と吟ず猿と做て。所を知らずとの故事に似たり。然るよりあらとに知るべきも。元に持永主僕に姑麻姫と。男にも似た轎子の内より猿猴の暴出る。喜の変卦に胆を淺と吐嗟と叫び。喜課げば。猿猴に。奔狂して跳梁し。持永に。抱着んとしたれば。持永駭に振拂に。逃れ媒鳥泰勝に。仆ふ。推乃と突退け。遣違に。捕捉んと。角へ。快と。宛飛鳥の如く。縦横に。凝に奔走と。目今前に在と。狂に。忽然と。後より。又抱着く。狂態奮發。同類異類の分別も。無。情慾越に火の如く。焚ぶ。もあり。げれば。大家美麗せん術も。賞緑られ。とて。那へ避け。這へ。逃げ。不狂人も。共侶に。狂ぶ。中に。長總に。喜の始に。大く。頭。影。と。ぶ。られて。俯ぶ。仆に。起ぶ。ぶ。ぶ。頭と。抱ぶ。ぶ。ぶ。の。援落ると。合に。抗に。撥乱され。髪の杜。貌。ねんと。程に。猿猴に。男女の。差別も。なく。又長總に。走。機り。て。吐嗟と。叫ぶと。推轉と。背に。登り。抱締て。溢れ。形。

長總へやと聲ゆり立て連ふ帮助と求れども立寄らず又實縁ゝべ砂を棄んも大人氣ゝまれ人家左右ゝく近ゝべ長總ゝよ困ゝ果て。友復さと岡極げども項と強く獻を着られて息も絶ゝべ蟹ゝるを大家ゝゝる堪ざれば猿猴と戯れて走ゝる程もあらぬ豪表ゝるふ調伏の印を結ぶ只金ゝる呪文と共ふ猿猴ハ一聲苦と叫ぶ仰反れて死でけゝ是を支ゝ鎮れども爲理ゝ最持永ハ怒ふゆ堪ぎ聲苛立てせをれ媒鳥水入若们何を所役ふゝ係まで不覚を取らゝる今ゝも許あゝ推並でゝ戯ふせん這里へ出ゝと敦圍豆恭く刀の柄ふゝ掛れ泰勝媒鳥駭狼て共倡ふ陳ゝゝ叱ゝ理ゝ為れゝ在下们ハ初ゝ毫も脱落ゝゝ御ふ那松原へ赴て樹陽れてゝゝ程ふ轎子ふゝゝ賀ゝ轎漆の婀嬢と轎夫と俱ふ五六名の伴當ゝ從ゝ如意宝珠院のゝゝ向ゝゝ推量ゝれゝ詳ゝ知ゝく御ふ一個の力士ゝ迹ゝゝ跟てゝ往方ゝ相極めゝゝ思ふ錯ゝゝゝ轎子ハ宝珠院へ舁入れゝ登時力士ハ前ゝ経紀人の家ふ立ゝゝ今轎子ふゝゝ賀て宝珠院へ参詣ゝゝ何処の人ゝ知ゝゝゝ外々ゝく向ゝゝゝの屋主答ゝゝ他ハ九村ふ隠れゝゝ柄姑麿ゝ姫刀祢ゝゝ姫ハ仲ゝゝ時ゝ寺内ふ同宿ゝゝ九村へ程徒ゝゝ折々参詣ゝゝ伴當ゝ面書ゝゝ這頭ゝ知ゝゝゝ正可ふゝゝ

等程ふ山岡ふ傾ゝる晴時ふ長ふ姑麿ゝ姫ハ初ゝ轎子ゝゝ賀ゝ寺ゝゝ入て本ふ入れゝ隊配ゝ荷三郎ハ轎子ハ那秘符ゝ書く投機ゝ我们ハ伴當ゝ趣威走ゝゝ加持ゝ入れゝ麻素ゝ偽ゝゝふ轎子ゝ重勝ゝ舁ゝ去ゝゝふ途ゝ猿猴ふ変ゝ敦ゝゝゝ知ゝゝ憤ふ是も那妙ゝ術ふゝゝゝゝ迹代ゝゝゝ釋ゝゝ持永ゝ怒ふ業ゝ毫も聽ゝ罵責れゝ豪表ふ雲時ゝ這人ゝ衍ゝゝ老衲ゝ初ゝゝ漫ふ敵ゝ侮ゝ用心疎ゝゝゝ那幻術ふ頭毛ゝ一條抜ゝゝ氣ゝ吹ゝ物ふ形體ふ做ゝゝ姑麿ゝ姫ゝゝ術ゝ迹ゝ徒來人ゝ愚ふせゝ這変體ゝ林ゝ法ゝ始ゝゝ仏ゝ輒く虜ふゝゝゝ拙僧ゝ脱落ゝ時ハ聊後れたれども剛大破形の秘印ゝ結ゝ口ふ呪文ゝ念ゝ猿猴ハ忽地斃れゝ是ゝ恐合ゝゝ拙僧ハ何事も前ゝ知る奇特ふゝゝ這轎子ゝ持ゝゝ姑麿ゝ姫ゝ反ゝ悟ゝゝゝゝ相応ゝゝゝゝ挾ゝゝ者ふゝゝ約束人ふ用心ハ危ゝ賢ゝゝ安ゝ愚ゝゝゝ人物ゝ視ゝゝ徒ゝ御ふ人ゝゝゝゝ来て首尾ゝ注進ゝゝ今更詐ゝ聚合ゝゝ是ゝ千虚ふ一失ハ頭人達の越度ふゝゝゝ

東京堂印刷

人を帮助て身の拙なきを恥ぢ、勝解を持ち、怒を理りて、屢嘆息をなす。登時豪表又かの那猴い、姑麼姫の仇を前りもて拔く形代でいへば、宅を去ること七歩あり。己の方に棒あり、已と申し地枝八合、後に必姑麼姫、這里に来る福ひあらん一時の敗れ患ひ足らず、最後の捷て全勝あれ。今一番に限らんと慰られて、持ち憶ぶも苦笑ひ、老師の教に儘て、這事生を埋めさせんとて媒鳥木工人其力士の猴を持て、庭に出でたり。外面に出んとすれば泰勝媒鳥、何と応。死くう麻斯地を引起て、力まで遮ぎて、共侶に言ふ。後方に従へ豪表も持ち、倶て庭に出でたり。外程に荷二郎、御国泰勝媒鳥仁と倶に姑麼姫の轎を衛りて、かの来れども、新参の者なれば、身も亦賤しかりけれ。奥に出入を許されず。去関の次の間に取送られて、獨坐。夜の初更に成るまで、物喝とる者もなく、泰勝媒鳥も出て来ず。厚く詩りて、肚裏に思ふ。御国奥に人々の立騒ぐ聲の聞えて、倘姑麼姫を走せ、然ども所以あるべ、縱免許をなさるれ、那里までいてたとも首を捕らず過ぎ、鶴蚌の廣れを来んと尋思て、身を起て、不知案内の間毎々、偷に動て探迷ひもせず。其頭を出る者もなれば、那轎を引居る坐席に到て四下を探ふ。這里も人影なく、四隅に横たる燭臺、焼枯の蓋長く垂て、朦朧として薄闇く、燭涙凝て、無水に似る。鼻に臭き、暗を定めて、轎の頭を探ふ。焼捨る香の煙に、頭都を立升る。偷に一個の婦人の頭髪を酷く撫乱て、横俯に臥る。息絶果るに似れば、荷二郎に訴て、詩ちも置れ、左の方を探ふ。温を動脉に原来死ぬ。試に、腕を鍋掴て抱起て、光に就て初て顔を見れば、是則別人、名を日屬て、識る長總、吸活をと胸前

膳推伏られ折憶を膳を撲り呼吸僅に暢ふの我もあくで存けど持永主僕も駭に紛れて走るのを。死くる猿猴を埋んとそ這里ゆとそ多ーと既ふ忘時も棹と剛才荷三郎が活と入れる修煉が危殆に殺まく。心地清ふ多のく身の那香爐の頭が在と憶ぞも隨喜破良の香煙鼻へ入るも稍久かるとる強く猛可ふ發動と姑くも住られ心正ー妖子で破良の害ある艶香の淫婦と醉せと義へ信ある死該ぞ。荷三郎へ。然ず心もつぞ既ふて長總が卒倒本復あるとそ怡悅ふ堪ず聲と情めやと嘲我妹す荷三郎ぞ。あん身へ幸あと何の既ると這里ゆとそ我が隆光と欺計て是ふ自滅と合ーな密訴のと此ゆ一狡欲ぞ所ふ初ぞ。あん身と夫婦とあん與ぞ別後の苦樂ぞ。毒ぞ報ぞ甚ぞ。と同ふ答ふ長總ふ持れ機ると合ふ大く。さて原來あん身ふ荷三郎が額ぞ二字の忘れ四次と喚ん相応から非除五字ぞ千萬字ぞ。ふ記書ぞと厚塵塚の會話のあれとそ過ると同ぞ要ー。これぞ倍て緊要ぞ說話ふ這個の轎子の内ぞ小憩時の假寐の枕快ぞと合ると弗と摘と身と起せば荷三郎ふ嘘疾ー痛と。ふ初て焦木杭ゆ附易火と情慾の發揚氣寝る間を花の普賢象是極樂の轎子と引同俱ふ佳月の雲ふ

隱る風情ぞ引戸と内ると閉ふけ浩処ふ條持嬢鳥ふ西三個の力士と俱ふ猿猴と吉方ふ埋果て又彼坐席ふ捨措る姑麿姫の轎子ぞ外面ふ出ぞんそ。ふ連立て多る程ふ方絶長總と荷三郎が轎子の内ふ潜び入ると。賄快く霏と入れけれ喫醋る堪ず聲ゆ立て人々ゆ出會ふ流奔児ぞ。ふ快と喚立る聲ふ驚く水造泰勝持永も何ぞと走ぞ共ふ來ふけれ嬢鳥ふ力士と後方ふ坐ると。持永ふ票ぞ在下ふ那猿猴と行者の指揮ふ從ふ這力士ふ埋ぞ。ふ支既ふ果ふ這轎子と外面ふ捨ぞんと思ふ。姑ぞ這里ふ來ふ折入脚ぞ。藪者ふ是則別入ると那丞綿張の荷三郎が長總と。ふ被ふて這轎子ぞ密會ると鼻息ふ。ふ嫉ふ出京と正司ふ認めふ。ふ棹れぞ泰勝ふ俱ふ空ず。ふ毅然ぞ與と喚立ると。ふ持永ふ聞て。ふ憤ぶと奴ふ。ふ我ふ千心萬慮と盡と奪ふ。ふ姑麿姫ふ姑麿姫ふ山猿ぞ不思議ふ恥辱と及ぶる主の暴ぶと臭ふ樂ふ。猶且處もあると那轎子ぞ悄會ると猿猴も必ー人面獸心引揖ぞ。ふ推並ぶ親新刀と鉾ぶ。ふ人夷躍躍ふと。ふ敦圍暴く下知ると後方ふ來ると豪家表ふ找ぞも寄ぞ立在ると。ふ然ば嫖鳥ふ本意と悔ー烈ー。ふ下知と。ふ疑議ぞ兼ると。ふ心ー。ふ両個の力士も共侶ふ轎子の頭ふ找ぞ。ふ口と開んぞ程ふ動靜と覗ぞ。ふ

隠形の印を結びて口中に呪文を念じる那時速し。這時遅し。媒鳥が分士が左右を衛る。走り蒐る轎子の引戸を撲地と開放せば。正に両個と思ひし長總いとまぞ。荷二郎一名内に在り駭慌て滾出で。媒鳥に誘はれ分士が肱肘捉り走り動せば。俄に推居け。持永を伝へ媒鳥何者と見る。その轎子内這奴の長總に在り。波蘇怒に中ぶ。とられて媒鳥に虚慮々々と屡西東。とかくして鄙出に正可申乙三名悄入るを認めて敵の在りまを。躍せ。扱ぐ招て住んとの。持永黙頭。然が開放を縛縛。眼く拷問せよかと再度の下知に。條持媒鳥に。僂に解捨る麻索の其頭に。あり。如竟と合る抗つ。繰よせ。索を横んと立寄るを。荷二郎驚ぐ。分士が。合まれ。脚を振拂ひ持永に。対して。やよ郎君。怒を鎮めて。禀を。聞召れよ。小可然せる功をけれども。拷問せ。れ罪。ある。なぐ。人の諫を。坐に信て。慌まぐる。寃枉を。眉に。ある。果び。持永の眼を。瞪る。聲荒立て。黙れ。癖者。大胆。汝。今。怒に長總が在り。なるを。云云と陳ずれば。然が。を。罪。なるを。抑汝。誰が。許。合と。迫て。我便室。近く。找入る。目。足。嗚。呼。罵て。轎子に。躍れ。是。倫。児。の。進退。を。不良。心。頭。然。然。も。頼陳。ぞ。と。罵。の。懲。せ。ど。怯。る。荷二郎。冷笑。開。又。身。の。邪精。と。思。も。天。か。那。姑。麿。帰。と。綱。を。遊。佐。る。加。勢。に。央。て。日。中。一。日。骨。を。折。る。果。初。更。に。

で。夜食一碗賜ら。ぞ。大。の。氣。も。あ。る。反。を。関。の。次。の。間。に。安。置。れ。て。坐。頭。ら。壁。に。凭。れ。酒。でも。飲。んと。ぞ。も。覚。ず。這。頭。も。漫。に。迷。ひ。ぞ。れ。ぞ。も。絶。て。人。氣。の。ない。那。轎。子。に。臥。置。れ。て。明。る。姑。麿。迷。佐。選。ん。ぞ。ぞ。と。嘆。ぞ。ば。身。も。亦。姑。麿。姫。と。綱。ぞ。ば。倫。児。と。獨。小。可。の。ぞ。ん。ぞ。と。ぞ。も。果。ば。持。永。の。面。色。忽。地。分。ど。く。身。と。戰。ば。聲。高。に。噴。古。長。に。白。物。奴。ば。息。の。音。佳。ん。と。走。る。ば。身。と。有。に。て。詞。徐。に。諫。る。ば。大。ぞ。ば。ば。震。怒。に。理。に。ば。ば。る。に。且。這。荷。郎。に。就。盛。王。に。今。番。の。加。勢。に。ば。ば。ば。ば。ば。ば。又。姑。麿。姫。に。笑。れ。ん。ば。ば。ば。ば。と。思。ば。ば。ば。ば。と。寛。釋。ば。ば。の。理。ば。ば。に。泰。勝。も。亦。共。に。利。害。に。舒。て。勸。解。ば。ば。持。永。ば。ば。ば。ば。怒。に。理。め。て。昔。の。処。に。立。ば。の。豪。表。ば。ば。ば。ば。対。て。老。師。の。諭。ば。ば。ば。ば。ば。ば。鏡。ば。ば。ば。ば。ば。ば

ちゃみせん
そとり
荷二郎
ちゃみせん
そとり
荷二郎
像贊一十
五咏又作
者所自題
有像第五十六
豪衷幻術隱長總

表示揖し然而荷二郎と牽立て面会を投て退りけり。登時家良へ媒鳥泰勝が出て来れば、ひそかに見送の果ぬさび兜文を倉れ。怪むべ長總の形體安定顕れて忽然と前の在り家良ふら對して衢に最も危ふ一ふ聖人の御教よりは我身ぞ多人に見られ然るのみ。悄と轎子と立並てそぶ低る身の法衣の袖の陰に躲れて恭しく立る。たゞ一筋に詞を陳ぶ書かり。現再生御洪恩死なんとも忘れ難し。及び難き及び法樹とも仰ぎ入れ。と仰せられ。仰られん事と憐む故る勿論仰い當初那荷二郎が哄誘れて權且枕を並べるも又隆光が妻ふ子と荷二郎と疎果て舊恨を復さえ恩ひ。我よく知り。今も今るや不吉や思念の外多。今宵の密會いまぞ佳境に入りぬ。夏の敗れを及びかぬる。今ぞ不可愛く言て送懸に狡甚麽ぞと問へ長總顔ち赧ぬ。何ぞ明く地過去未來まで知召ぬ身を隠さべ。遠江を荷二郎が獄舍の苦艱と極れり。恩ふ似て恩ふ夜二郎さ隆光さ那奴ぞ為ふ非命を終り。然へ亡れ。破貞ふ名香の奇特ぞ我ぞ。鉢那奴と宿ぞ。欲ふ思ふ似ぬと恥ぞ。悔ぬ腹辛く

て。ぞ。ふ。豪家表然ぞ。と點頭ぞ。差寄て。人ぞ。の搗鬼ぞ。今宵の恩と思と知ぬ酒家と慰ぬ。

て　と

と。ぞ。合り引ぞ。れ。長總が吐嗟とぞ。ふ。顔と背と振拂ぞ。寡に有かぬ。ぞ。狭く焼れぬ。女人の出家と落ぞ。永劫浮む瀬ぞ。ぞ。の。ぞ。の。ぞ。の

殺されて長總の安危を知らぬ人の問ふさへ忌む。折々心ある人の加勢は差來れども人並の骨を折る者は我身だに人並の関の次の間にうろ〳〵竜ん物欲くるりのまろ〳〵奥のうつぶせ人聲のせうみの繁口光景をうつまくはく折るまくの一碗の酒を賜るとも和んと点ぬ躰で立坐で機嫌つて来る奥座敷に長總ぶ仆俯して在りければ扶起して活入れ不立場の息坐で連情を餽りて如何も措れぞ侭那幡を入れる。折り〳〵斬殺の條持生ぶ入れて脱る略る。既に難儀及び今の解せ奥長總の形體い銷て元の通り取も怪る程の時の物怪の幸いに左も右も人の賜も満奉の罪を免れ行者并に紀身太郎君を諫め奉り〳〵餓されて首が別れぬ事ふ。あら再生の御恩を忘れ恨切ふ音待の御好意を我を忘る。秘き太郎君の恩を忘れ〳〵ん噴飯に充るの。抑我妻長總の何の比より這陳館ふ住て事女ぬ事れや。古文皆意表ふ為るとの。今夢の地ぞ。願ふ諸の人を請問ふを泰勝聞て頷て和郎が疑怒の然もあべ。那長總の遊佐殿の紹介ふ我分子れ住て事女ぬ事れ。平月の時候を却長總の罪と餽されや就盛主ふ思れ人是所以ぬる。腹を立て具ふ報ふ件の婦人遊佐殿。皮和郎ぬ事ふ為躰と夫妻約束を為る。他ぬ東國ふ在り

時名高る騙賊の猾張者。人を殺し宝を越る。花盗悪ヨ人の正可ふ密訴を為り。就盛主信容て和郎が功を賞ふ為る。死罪を餽せ〳〵ふ。放免ふ為れ。那從兵蒼思與蒼九郎ふ我ふ為れ。紛れ〳〵ふ徒れ甲夜ふ長總が和郎と宿る。欲せ〳〵。願ふ破貞香の奇特を。実情出ぬ。或行者の戯れ。徒れ長總の安を奉る。隠せ後者是も亦知る。又郎君の怒を穏て和郎が欲んと為ぬ。姑現に和郎を又術て長總の安を奉る。隠せ後者是も亦知る。又郎君の怒を穏て和郎が欲んと為ぬ。姑麻呂姫を返光猿猴の暴を為る。那猿猴の為ぬ事情ぬ箇様〳〵と知らぬ。豪長が持永ふ贈る香の為ぬ。漏さも悟る地ふ告知れ。荷二郎怒ふ堪ず七歯を切り脇を扼る疾視て小雷時ふ為せ〳〵と思ふ。嗟嘆と原来我徒る。皆長總奴を詰る。然て知る暴計の奴ぬ。拷問の苦痛ふ堪ず口走る。誰が知る長總ぬ曾根山の獄舎ふ幽死を拯ふ為る恩を忘れ。疎薄情遂ふ這身の仇を敵。偏ふ栄利を謀り〳〵倘生ぶ那奴を舌ふ接ぬ我這執腸を何の日ふ為ん。憎ぶ〳〵縁延る。怪を恐れ泰勝然れど。慰ふ其の憤ふ理る為れ。性起ふ言の差地わ〳〵我今より和郎の與ふ悟る地長總ふ怨屬て他ぬ意表を現ん他ぬ本心聊も和郎と思ふ為ん。その折ふ便宜を求めて怨を復れ後悔る〳〵姑且ふ詐ふ

儘はずと潛かに諫れば荷二郎眉を顰めて。舊縁の赤尓可と然まで不思召るて。胆を銘じて奉ずべし。僧異日御用も叶べし。何事も仰付られよ。身を碎き骨を折るとも。御恩を答ずんとの泰勝も然べき事と我も亦憑置べき密談の我親の伊勢の國司北畠殿の權臣を。姉の國司の側室なれども。我身犯せる罪あり。故郷を追放せられ。その故の菌様々。稲城が吉の顛末を。詞煩く真示て。侍れば我が両個の仇の一個の女なるを。怕るる足らねども。那信夫が義兄なる。達小六と吳做せる奴の武藝を提れ後生和主なる義なるて。我が外の折毋解を。倫が防ぐ後安く思の多し。又只小六ばかりのみを。角憂むべきもの。異日談ずとの荷二郎異議なく仰やるるの小六とのの後生。這地へ来給ふとあらば。小集知らるる。間敷ず。身の與が永く患と拂ぶ。仔の如く。泰勝が。とと憑く。諸ひ。泰勝が。狡て。然が明日が遊佐の城へ。遣を折折出て来よ。我郎君が提成稟と。恩顧のあが做べ。荷二郎が勝の狡ひ肝胆と吐る意表と事世。密談が更闌かに。人く睡る。遣佐の城へ。遣を折の詳辞別れて。遊佐の城へ。遣を折の程が長總が憶を豪表が挑れ。脱べもあくまれば。同谷を。と。音表儘と。假寐の枕と並べ。折柱裏が。我身の遍世られば。情郎が死別れ。

哭ける。荷二郎も。這行者が死と。殺れ。恩義の枷の。身と儘ぬ。薄情さと。涙を。滴。かつ。豪表が後も。長總が獨宿る。臥房が潛び。者の。三四宵が。隨。這悪僧が秘戯を。熟と。房。ども。医。かれば。長總が不覚が佳境が入り。樂まると。水魚の契と結び。いう。憎く。思が。遂が。這。醜態が。由て。今。古と。憶が。難。臨て。身を。汚されば。死と。の。多の。芳。節婦。烈女が。及ぶ。ども。の。始を。慎。かの如。が。生。現長總が。栄枯。是。淫奔が。始。又。淫奔の。咎が。終。為が。解く。世の。婦女子。倣が。不祥が。遇ず。各。幸。と。思。よく。の。始。慎。汝が。出。汝。返。が。福。あ。て。禍。ん。思。べ。怕。べ。間。話。休題。徒。面。慈。母。暮。とせ。季。三。四。日。が。豪表。持。が。慌。別。豈。春。京。師。務。多。又。見。参。入。れ。と。既。坂。赴。折。長總。が。被。衣。初。の。衣。料。せ。が。と。偷。些。の。金。と。取。と。飄。然。と。歩。て。出。然。豪表。長。長總。人。知。快。樂。あ。又。泰勝。荷二郎。悄。地。交。結。ら。も。人。知。好。処。糸。あ。只。持。永。の。木。も。就。草。も。就。乳。腐。らと。壁。向。吻。息。外。歩。笠。詩。策。も。ば。什。麼。人。会。ふ。と。先。度。恥。辱。雪。術。あ。や。左。右。程。遊佐。就。盛。歳。暮。佳。義。伴。當。許。来。ば。持。永。躯。對。面。と。先。書。院。祝。儀。果。介。後。閑。室。招。

きて額と合して談ずるに。知らるゝ。姑麻姫と婚姻の一條は初那氏人の不埒を還て恥辱を取りかの送恨の堪たる罪妙と途中奪合せんと謀り一度の趣き齊天行者の聯査をもかも亦知られしと雖ども今は隱密なるも既に本意の如く他の上墳の折を張て兵毎まく遣て。轎子の依奪食らへる我這迫所を知て來ければ只の間に怨恨の姫を山樵の輩が暴出する為体は箇樣々々ふれ送恨を查しのみか。再度の恥辱を遇ぶる那隨ふて寢とは世の胡盧ふるんのを。都いふ甚だ素懷と遂んを願へば誨ずるを。乞他事も多く悄語して就盛聲の沈吟とを憚あり。

人は。滿足を。消息して這婚姻を告て免許をとを。我第二法は納米を曩に没官られる。姑麻姫の家の重宝菊水の短刀菊水の旗錦の御旗楠氏の舊記をどを。とせまく欲とを。愛するあるとを。それ吳嚴君必許容あて那種を遮与へんを。那妙を引て。第一の大綱を第三法は明年の春。卑職年始の拜賀とて上洛の折便宜を

とを。因て忠告仕ん今より卑職は儘へんぐ。這婚姻の媒介は必敷ふを。持永感服して且然とを。

ぞを。亦甚麽なる妙策ぞと。問へば就盛聲を悄を。約這婚姻の椿の修法あり。然るの第一法は。

悄々地に嚴君は請禀して這婚姻を將軍家義持の御諚と披露を。楠正直は。

姫は。又姑麻姫は没官られ。家の宝を没る事あり。を推辭ぶ正直は違諚の罪を免れて。偽れば姫は忍とを叔父と言を意を。

を。ふん。既に如の如。勢已を。ぶを。姑麻姫義刻の男婦とを。郎を折を。

解を。持永を感服。秋の十倍を。花開を。合を。愉快を稱る。畢竟就盛の持永の然を。

穿を。姑麻姫と婚姻の笙詩策を施るを。吾成就を。

作者云姑麻姫は。と。難迫の腹稿を。看官必懽ぶ。本傳第一の関目。豫は必本集を。寫見を。

集五卷と相応を。楮數も限あれば。其処を。辛皮を。姑筆を。閑を。送慨を。且本集を演る所は。

ヨヲ五集の續を。後集發行の折を。詳を。又云本集を。癸巳の秋八月中旬。

稿を創て。冬十月九日を稿を脱る。傳を。年内發兒を。ければ一稔遲延を。

綴て。緩を。作者の本意を。梓行の書賈の隨意を。何いを。看官を。

開卷驚奇俠客傳第四集卷之五終

畢玉堂印發

○著作堂手集開卷驚奇俠客傳第四集畫著筆工割賦目次　羣玉堂藏梓

出像　二世　柳川重信

浄書　谷墨田　金仙橋川

第一卷　浅倉伊八

第二卷　横田守

雕鏤　第三卷　櫻木藤吉

第四卷　横田守

第五卷　田中三八

○曲亭翁新編國字稗史近刻畧目

開卷驚奇俠客傳第五集　毎集五卷　第一集より第三集まで追々書肆に置いて第四集いまの度出販第五集陸續刊行

近世説美少年録第四輯　毎集五卷　第一輯より第三輯まで共に一十五卷追々ふうり中に置いて第四輯第五輯近日発行

水滸後畫傳第一集　毎集五卷　二世柳川重信画　第一集近日刊行

この書は明の雁宕山樵が水滸後傳四十回を翻譯通俗に且原傳の趣向宜しくなる処をば筆削翻案して全美の冊子にもなれば加るに一画ごとに一ぺいの賛を書きいれたるは婦幼にもよろこばるる通俗本と同じくなれば婦幼にもよろこばるる通俗本と同じくなれば原傳の妙処をまもるとかはるまじきためなり

水滸畧傳第一集　毎集五卷　柳川重信画　二世柳川重信補画　第一集近日刊行

この一書は水滸傳一百八人の列傳を一人別に畧述して加るに批評をもとりて金聖歎が水滸の評に倣ひまるとまるかの輯と看官の慰にもなるべきものと則是稗史を愛る人々の称賞すべき奇書なれば原傳の妙処をまもるとかはるまじきためなり

俠客少年二書衆議評判記第一集　一名圖説八犬の書ふるれば原本のもとづくまるとなりとこ傳もとづく　諸才子評定　近日出販

曲亭翁閲

伏てまるこの俠客傳第一集の出像は溪齋英泉子の画ならんなり

この後故あるこの第二集の彩像は柳川重信子の筆に成るまるを発まるを

閏月共合ふ重信子物故せしかば第三集に至りては歌川国貞子に

なりこの画まるを成るふ中ねども世柳川重信子ならで先人の筆に

ぶ画んとの欲をこのれば世曲亭の翁に請ふて本集ならんと

この後の重信子と求めてうかれば全書国貞子の画ならんと

あるべき筆の画者の意をもとに蛇足の筆にまるのあらんと

違ぶ者の又切璃瑠璃と綴編に花を添んとの美くの四方の君子先人の

あるべきに限りて高評を乞ふ

○吉今年歌舞伎の仙女香　一つ　四十八文　黒油美人香　一つ　四十八文　浅草南馬道三丁目西側　坂本氏

○家傳神女湯　諸病の妙薬　一包代百銅

○精制裏奇應丸　大包代金弐朱　小包代金弐朱

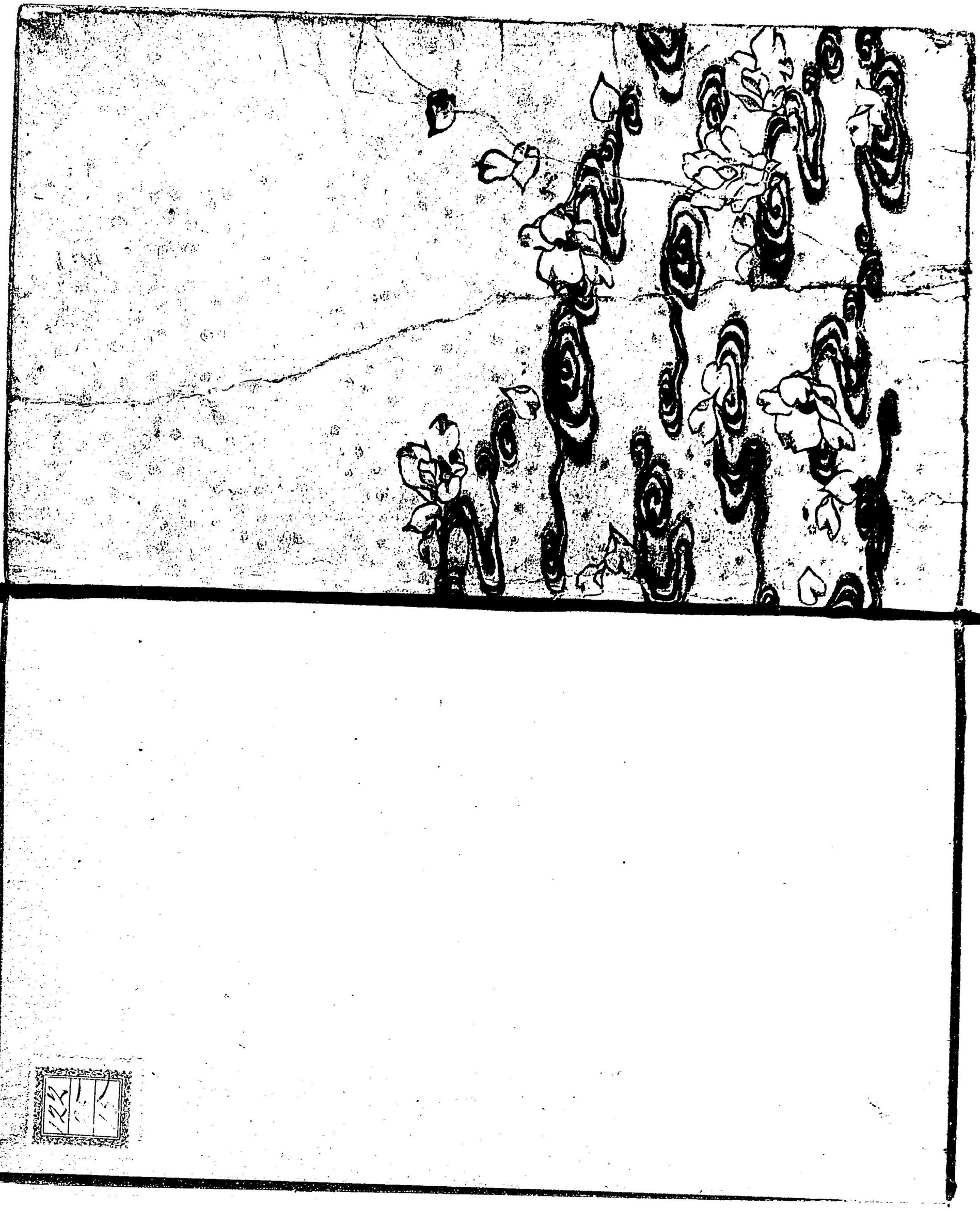
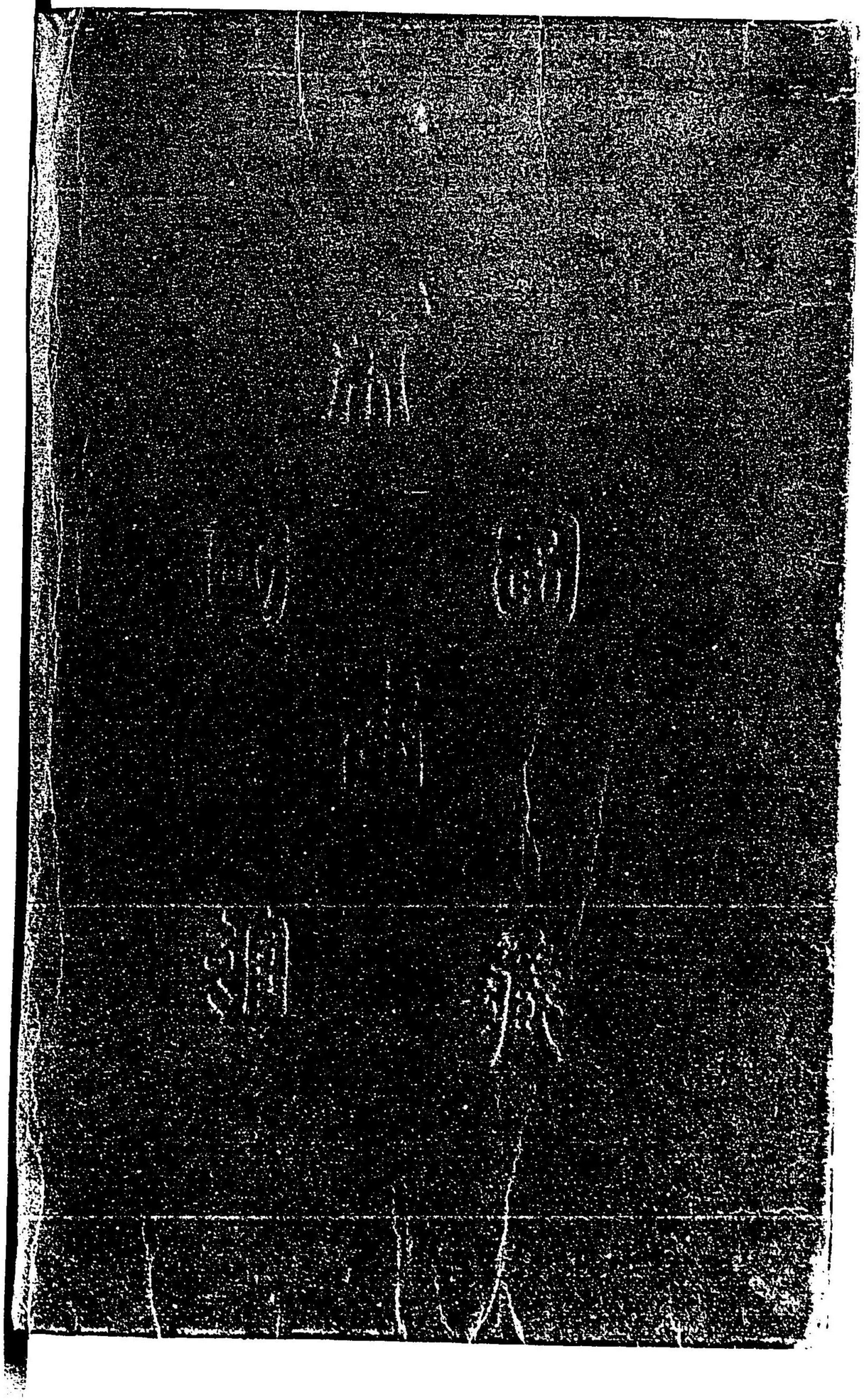
○熊胆黒丸子　一包代五十

○婦人つぶ虫の妙薬　一包六十四銅　手包三十二銅

○裏葉本家　神田明神下同朋町東横丁　滝澤氏

弘所　元飯田町中坂下南側向　たるさ沢氏

天保六年乙未春正月吉日發行

江戸小傳馬町三町目　丁子屋平兵衛

書林　大阪心齋橋筋博労町　河内屋茂兵衛板